一話

「お疲れ様でした」
店主に一礼し、バイト先の酒屋を出ると、空は茜色に染まっていた。
今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、それから僕は、視界いっぱいに広がる街を眺めた。
なんということはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを焼き尽くされた。
魔術王による人類史焼却。
世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。
「……」
そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れていた。
視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。
誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。
「……」

胸の内を、万感の思いが満たす。
確かに自分は、この世界を救ったのだと。
自分たちの手で拒んだ過去であっても、あの日々を忘れることはない。
何もかもが黒焦げになったあの焼け野原を、今でも覚えている。
そこで得た出会いや別れも、何一つ忘れることなく鮮明に記憶している。
――――我が親愛なる、誠の一文字を背負った剣士のことも。
「……帰ろう」
僕もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。
愛すべき我が家。
今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から二十分。
大橋を渡った先にそのアパートは存在する。
「……地震怖いなぁ」

十人中十人がオンボロと言うであろうその外観に苦笑が漏れる。
ぼろ臭さが逆に懐かしいと言ってこのアパートへの居住を決めた相方は、住めば都ということで慣れ始めているようだけど、個人的にはもう少し綺麗な所に引っ越したい所存だ。
なにせ大事な、きっと世界で一番大切な人を住まわせるのだから。
……まぁ、今のところ主に予算の都合で引っ越しの予定はないんだけど。
甲斐性なしな自分に半ば呆れながら錆びついた階段を上る。
二階の端。
日当たりだけはいい角部屋の、これまた古臭いチャイムを押すと、ドアの向こうからパタパタと足音が届き、そして、
「おかえりなさいませ、マスター！」
そんな、快活な声が僕を出迎えてくれた。
桜色の着物に割烹着を重ねた彼女は、今にもそのアホ毛をぶんぶんと振り始めそうなほどに僕の帰宅を喜んでいて。
その眩しい笑顔を見ただけで、今日一日の疲れが吹き飛ぶのが実感できた。

「うん、ただいま。……ただいま、沖田さん」
誰よりも信頼する剣士に、僕は心からの笑顔を返した。

世界を救い、その後処理を全て済ませた後、僕はカルデアには残らず日常に帰るという選択をした。
元々、魔術の腕はからっきしだったから、カルデアの研究員として残るというのは少し無理のある話だった。
ダヴィンチちゃんを始めとしたメンバーたちは別れを惜しんでくれたけど、最後には快く送り出してくれた。
『どうか元気で。君に最上の幸福があることを祈るよ』
涙ながらに僕の手を取り、笑顔を見せてくれたダヴィンチちゃんの顔を覚えている。
そうして、僅かな資金と幾つかの魔術礼装を手に、僕はカルデアを出たんだけど……。

「よっ、ほっ」
「うまいね、沖田さん」
「ええ、もう慣れましたとも！　マスターと一緒なら洋食も何のそのです！」
元気よくそう返しながら、テンポよくハンバーグのタネをこねる沖田さんの隣で、僕は人参のグラッセの味見をする。うん、菓子のように甘いけれど、甘いものが好きな彼女にはちょうどいいだろう。
「そちらの人参の味はいかがですか？　沖田さんは甘い方が好きです！」
「うん、知ってる。だから甘めにしておいたよ」
子供舌な、あるいは女の子な剣士にくすりと笑いながら、僕は小鍋の中の人参を一つ箸でつまんで、彼女の方へと向けた。
「ほら、あーん」
味見をさせようとした僕に、
「え！？」

しかし沖田さんは、瞬時に顔を真っ赤にして硬直した。
「え？」
「あっいえ、その……」
思わず疑問符を浮かべると、彼女はもじもじとしながら、上目遣いで、
「……そういった事には、まだ慣れなくて……」
「……洋食には慣れたのに？」
「はい……」
「……」
絶句する僕に、沖田さんはおずおずと不安そうな目でこちらを見上げて、
「幻滅、したでしょうか？」
「いや、全然」
「そ、そうですか……よかっ「むしろあーん程度で恥ずかしがる僕のお嫁さんはとっても可愛いなって」へぇっ！？」
すごい声出たな今。カルデアに残っているノッブや土方さんにも聞かせてやりたかった。

「か、かわ……」
和む僕の眼前、新撰組最強の剣士は耳まで真っ赤にしながらあわあわと震え、
「……こふっ！」
そして吐血した。
当然のように、目の前に立っていた僕のエプロンが血に染まる。
「す、すすすすいません！　つい気が動転してしまって……」
「いや、いいよ。もう慣れたというか、こういう事も受け入れるって決めたから。沖田さんを選んだ時に」
「マスター……」
「だから大丈夫。遠慮なく吐いて、そして一緒にエプロンを洗おう」
「……はい」
僕の言葉に沖田さんは微笑み交じりに頷き、そして肩にとんと頭を当ててきた。
「マスター……」
親愛の込められたその声を聞きながら、僕は今日までの事を思い出していた。

誰よりも大切な彼女に告白したのは、確か最終決戦を終えて一か月後の事だった。
人理修復の後処理も八割方終了し、カルデアに落ち着きが戻ってきた頃、僕はかねてから募っていた想いを彼女に打ち明けた。
『私……ですか？』
マイルームで告白した僕に、親愛なる剣士殿は心底不思議そうな声で返してきた。
『い、いえ！　嫌なわけではないのですが、その……冗句か何かではないのですか？』
持ち前の豆腐メンタル＆マイナス思考により半信半疑どころか九割方疑いの姿勢でこちらの一世一代のプロポーズに相対した彼女は、しかし熱心な説得を経てようやくこちらの言葉を正面から受け止めてくれた。
『嫁に来てほしい、ですか……なるほど……』
『……』
『……こふっ』
突然の心的ストレスに吐血を挟んだものの、彼女は彼女なりに僕の言葉を噛みし

めてくれて。
『……わ、分かりました』
『私も、マスターの事は憎からず思っていましたし。あ、いえ、憎からずというか、恋慕っているというかー……う、また熱が出てきました……動悸も……』
『……正直、あまり色恋についてはよく分かりません。ですがマスター。あなたの側にいると、まるで春の陽だまりにいるように心が温かくなります。……恋というものがこの世に存在するのなら、きっとこれを恋と呼ぶのでしょう』
『な、なーんて！　沖田さん浮かれちゃってますね、あは、あはは……』
『……本当に、私でいいんですか？』
問いかけに、勿論と頷いた。
君でいいのではなく、君がいいのだと。
だからどうか、これからもずっと一緒にいてほしいと。
そう告げた僕に、彼女はこくりと頷いて。
『分かりました。では、この沖田総司。あなたの刀として、そしてあなたの妻として。これからも共に在り続けることを誓います』

凛とした態度で、プロポーズを受けてくれたのだった。

そうして彼女と僕は結ばれ、

『カルデアを出るんですか？　なら沖田さんもお供しますとも！』

『え？　二人で住むことになるが大丈夫か、ですか？　た、確かに……マスターと二人きり……こふっ』

『……ふ、不束者ですがよろしくお願いします』

カルデアを出た僕に当然のように彼女は付き従い、今もこうしてボロアパートで同棲している。

幸せだ。

幸せでいっぱいだ。

家に帰れば着物の似合う和風美少女が待ってくれていて。

キッチンに並び立ち、一緒にご飯を作ってくれて。

あったかいご飯を前に、小さな卓袱台を共に囲んでくれて。

「今日もお勤めご苦労様でした」
こんなことを言いながら、背中を洗い流してくれる。
これが幸せでなくて何だというのか。
「……風呂は別々でもいいと言うか、毎日背中を洗ってもらわなくてもいい気がするけど」
ごしごしと背中を洗われながら、苦笑交じりにつぶやく。
一応恋人同士というか、書類上のアレコレはないにしても夫婦として結ばれた身ではあるものの、未だバスタオル姿の彼女には慣れない。
「いえ！　妻として仕事から帰ってきた夫を労わるのは当然のことですから！」
「そういうものかな……」
「それに、私としても家のために頑張ってくれたマスターを労わりたいですし」
「……なら、これからもお願いしようかな」
「はい！」
元気よく返して、ごしごしと背中をこすってくる沖田さん。
いい嫁だ。可愛く明るく気遣いも満点。どこに出しても恥ずかしくない大和撫子

だと思う。
　こんな素敵な女の子と結ばれたなんてもはや罰が当たりそうなくらいだけど、世界を救ったご褒美だと思いたい。
「……あの、マスター」
「ん？」
　そんな阿呆な事を考えていた僕に、ふと背後から沖田さんが声をかけてきた。
「どうかした、沖田さん？」
　振り返ると、そこではバスタオル姿の沖田さんがやや頬を赤らめながら、おずおずといった様子で、
「いえ、その……労わる、というなら身体でご奉仕した方がよいのでしょうか？沖田さん、あまりそういうことには詳しくないのですが……」
「……誰から聞いたのそんな話」
「……メイヴさんから」
「そっか……」
　後で電話してシメてもらおう。そうだな、スパルタクスやレオニダスを筆頭にし

た筋肉サーヴァントたち複数名と共に狭い個室に入ってもらおう。暑苦しさでそのスイーツな脳も多少はマシになるだろう。彼らならメイヴに誘惑されてもスルーするだろうし。

「いや、そういうのはいいよ。今みたいに背中流したり肩揉んでくれるだけで十分」

「そ、そうですか……そうですよね、沖田さんの貧相な身体じゃマスターを満足させることはできないですしね……」

「……」

「ま、マスター？　顔が怖いですよ？」

「沖田さん」

「は、はい」

「次そういうこと言ったら怒るからね」

「え、あ、はい……分かり、ました……」

いまいち意味が分かってなさそうな顔で沖田さんは頷いた。

本人は貧相な身体というが、そんなことはない。決してない。全くない。

なだらかに見えていたが実はこれまではサラシが巻かれており実際は結構たわ

わな胸。
引き締まりつつも女性らしい柔らかさを残した太もも。
そして尻。
三拍子見事に揃ったチチシリフトモモの威力はまさに防御不能の三段突き。
そんな彼女と狭いボロアパートで寝食を共にする僕が、いったいどれほどの精神力を彼女を襲わないことに注ぎこんでいると思っているのか。
「ふう、こんなものですかね」
悶々と考え込んでいる内に、沖田さんは僕の背中を洗い終えた。
「ありがとう、沖田さん」
「いえいえ！　……では、その……湯船に、浸かりましょうか」
「……うん、入ろっか」
頷き、まず僕が湯船に入り、
「おいで、沖田さん」
沖田さんの入浴を促した。
「は、はい……お邪魔します」

そして、先に入ったこちらの両脚の間に、沖田さんはすっぽりと収まり、そっとこちらの胸に背中を預けてきた。
これが、同棲を始めてからの僕らの入浴スタイル。
浴槽が狭いからこうするしかないとは彼女の言。
一人ずつ入ればいいだけの話なんだけど、それを告げると彼女に涙目で睨まれた。
なんでも、僕に包まれている感覚がして安らぐらしい。
「こうしていると落ち着きますね……」
バスタオル着用とはいえほぼ全裸で異性と共に在るという状況に頬を赤らめながら、湯船と、そして僕という名の背もたれを堪能する沖田さん。
「あ……」
背後からそっと抱きしめると、彼女は嬉しそうに声を漏らした後、より一層こちらにもたれかかってきた。
「マスター……」
幸せそうにつぶやき、こちらに体を預けてくる沖田さん。
そのほっそりとした肩や綺麗なうなじに理性を削られぬよう、平常心平常心と心

のうちでつぶやきながら、僕は彼女をより深く抱きしめ、恋人との時間を満喫した。

沖田さんと結ばれてからしばらく経つんだけど。

僕らはまだ、恋人同士ですること全てをこなしたわけではなかった。

「……」

就寝前、布団の上で正座しながら、パジャマ姿の沖田さんは頬を真っ赤にしていて。

何度か深呼吸をしてから、決意を固めたと言いたげな強いまなざしで僕を見た。

「ではマスター、お願いします」

「あ、うん……そんなに勇気が要るなら別に無理しなくても……」

「い、いえ！　無理なんてしていません！　わ、私も、マスターとせ、接吻をしたいと思って、ます、から……」

どんどん声量を小さくしながら、しかし沖田さんはちゃんと自分の想いを口にしてくれて。

「あ……」
それを嬉しく思いながら、僕は彼女との距離を詰め、
「んっ……」
そっと、口づけを交わした。
「……し、しちゃいましたね」
永遠に思える数秒の後、沖田さんは照れ臭そうにはにかむ。
「なんだか慣れませんね、もう何十回もしているはずなのに。……何度やっても、夢心地で」
「……沖田さん」
「な、何でしょうか？」
「もう一回いい？」
「…はい」
照れ臭そうに、しかし嬉しそうに沖田さん柔らかく微笑み、目を閉じた。
そんな彼女を愛おしく思いながら、僕は彼女にそっとキスをして、その甘い感触を堪能する。

ご覧の通り、沖田さんはまだ恋人らしい触れ合いというものに慣れていないようだった。

そういったこと自体に嫌悪感を抱いているわけではないらしく、先程のように一緒にお風呂に入ったりキスに応じたりはしてくれるんだけど、何せまだ経験値が足りないようで、そういった事をするたびに顔を真っ赤にしたり、急すぎた時は吐血したりしている。

そんな初心な沖田さんは大変可愛いんだけど、こんな状態の彼女に性行為を求めればどうなるかは火を見るよりも明らか。布団が血で染まる事だろう。

そんなわけで、未だ僕らは夫婦のお勤めを果たしていない。

別に文句はない。そんな事がなくとも、沖田さんとの日々は最高に幸せだから。

ただ、たまに理性と戦わないといけない時が来るのが少しだけ辛いといえば辛い。

「ま、マスターー……」

「あ、ごめん。もうやめるね」

「い、いえ、もっと……」

「え？」

「もっとしてください……沖田さんを、たくさん愛してください……」
例えばそう、珍しく沖田さんが乗り気になって自分から求めてきた時とか。
紅潮した頬をそのままに、とろんとした瞳で僕にキスをせがむ彼女は普段の健やかな、少なくとも見目は健やかな彼女からは考えられないほどの色気を放っていて。
僕はそんな彼女を見るたびに、まるで靴紐を結び直すように、理性の枷をより強固に締め直す必要があった。
「贅沢な悩みなんだろうなぁ……」
「ん、ぷぁっ……悩み、ですか？」
「いや、こっちの話。……もう少し続ける？」
「は、はい……沖田さんも、もう少しだけ強く抱きしめてもいいですか？」
「もちろん。そうしてくれた方が嬉しいよ」
「で、では……」
言って、こちらの身体へぎゅっと抱きついてくる沖田さん。
「ん、んんっ……マスター、マスター……」
熱を分け合うように僕の頬へ頬を寄せたり、僕の唇へ触れるだけの口づけをした

りしてくる。
可愛い。本当に可愛い。
「マスター……」
ぎこちなくも精一杯恋慕の情を表現してくれる彼女の可憐さを前にすれば、悩みなんてものは一瞬で消し飛んでしまう。
結局は僕が頑張ればいいだけの事。
彼女の隣に立つ立派なマスターとして、自分の理性くらい継続させ続けるとしよう。
うん、と内心頷いた僕と共に、沖田さんはしばらく愛情表現に励んでいたものの。
「ん……そろそろ眠りましょうか、マスター。明日もお仕事ですし」
「だね」
「目覚ましはこの沖田さんにお任せください。ばっちり起こしてみせます」
「ありがと。目覚めのキスはお願いできるのかな」
「えっ！？　いえ、それは……考えて、おきます……」
「あ、考えてくれるんだ……」

「マスターが望むなら、私は……」
「……」
上目遣いで告げられた下半身に来るワードに思わず無言になった僕を他所に、沖田さんはしばらくもじもじとしていたものの、やがてもぞもぞと布団に入っていき、
「マスター」
そっと僕を呼び、ぽんぽんと自らの隣を叩いて示した。
そう、隣。同じ布団の隣。
この家には布団は一組しかなく、そしてそれが買い足される予定はない。
基本的に我が儘を言わない彼女の、数少ない要望故だ。
同棲を始めた日、この部屋に布団が一つしかないことに気づいた僕は床で寝ると告げ、『主かつ夫を床で眠らせるわけにはいかない』と沖田さんから猛反対を受け、『女の子を床で眠らせるわけにはいかない』と反論を展開した結果、僕らは同じ布団で眠ることとなり。
『……』
『……マスター』

『これは、いいものですね……あたたかくて、安らかで……』
『……これからも、こうして一緒に眠ってくれませんか？』
そんな願いを、彼女に抱かせることになった。
「ふふ……」
もぞもぞと布団に入った僕に、沖田さんは嬉しそうにずりずりと近づいてくる。
そして僕の腕を枕にしながら、柔らかな笑みを浮かべた。
「あたたかいです……一人で眠るよりもずっと」
病で床に伏せていた期間が多く、あまり布団に対しいい思い出がないであろう彼女がこうして穏やかに就寝することができるようになることを考えると、彼女と共に眠ることは大変有意義なことだ。
パジャマ姿の彼女に密着されるのはなかなかに応えるが、自分の獣じみた本能のために彼女の幸せを脅かすわけにはいかない。
それに、自分自身彼女と就寝を共にできることは嬉しかった。
ふと目が覚めた時、すぐそばに愛しい彼女がいることは、殊の外幸せを感じることなのだと最近気づいた。

「あ……」
そっと頭を撫でてやると、沖田さんは一瞬驚いたような顔をしてから、すぐさま喜色をその顔に滲ませ、すりすりとこちらの手に頭を擦りつけてきた。
「マスター……」
嬉しそうに僕を呼ぶ彼女に愛おしさが溢れ出す。
可憐な少女。
凛々しい剣士。
世界で一番大切な、僕の恋人。
「……そろそろ寝ようか」
「はい。……あ、マスター」
「何、ッ……沖田さん……」
「……おやすみなさい」
僕に不意打ちのキスを決めた後、はにかみながら告げる彼女に、
「……うん、おやすみ。おやすみ、沖田さん」
僕は微笑みを返しながらその小さな体を胸の中へと抱き寄せて。

そうして、彼女との日々が永遠に続くことを祈りながら、夢の世界へと落ちていった。

これはそんな物語。
大和撫子な彼女とどこにでもいるような自分の、幸福な日々の記録。